

「日本のアートにおける移民の表象と存在」

滝朝子（アーティスト・アクティビスト）

欧米では、アートは移民の社会包摂として機能している面がある。日本ではどうだろうか。移民の増加やオリンピックに伴う文化事業で「多文化」を表現するアートがメジャーになってきた。

私はアーティスト・ボランティアとして主にニューカマーの移民や難民と活動している。入管法改定反対の抗議運動として立ち上げたウェブ展示を中心事例に、日本のアート作品における移民の表象と存在について、特に移民を主体としてみた際の報告をする。

ウェブ展示に掲載したステートメントの一部を引用する。

「私たちは制作において当事者の意思を無視し搾取しないよう、アーティスト及び制作体制とその手続きを省みます。当事者の意思を無視した作品、及び作品公開に抗議します。人として関わり、その人たちの権利を奪わない形で、声をあげるべきだと考えます。」

日本のアートにおける移民の表象は、日本の政策と同じく差別的な扱いを無意識的にしている場合が多い。前提として、芸術文化の業界では性別や年齢などのヒエラルキーも強く残っており、さらに日本国籍のアーティストが移住者を表象する作品が公的に展示されることが多い。発表する側がマジョリティであり、その関係が差別をはらんでいたり、その制度を支えている側であったりして、それがそのまま表象される側との抑圧的なパワーバランスを踏襲してしまっている。

展示作品を、どう言った点に注意しながら紹介したか、作品に描かれる・参加した「移民」に関して、そしてアーティストの立ち位置や関わり方についてみていく。展示作家は、自らや親族が移民であったり、移住経験を持つ者も多い。社会事象や歴史・政治的関係性だけでなく、自身のアイデンティティと移民の持つアイデンティティ、分断や包摂について複眼的に表現されている。変化を包摂する際の恐れや喜びも現れている。歴史や制度を真っ向から認められないこの社会で、まずは過去・現在の変化を受け入れること、変化に対する表現を見つけることをこれらの作品は示唆している。

<展示作家名「作品名」>

Asako Taki × Okui Lala 「To ツー 通」

川上幸之介 「ALARA」

長倉友紀子 「BORDER」

近藤愛助 「here where you stood」

良知暁 「rát」

鄭梨愛 「チェサ (祭祀)」

飯山由貴 「オールド ロング ステイ」

本間メイ 「Anak Anak Negeri Matahari Terbit-日出ずる国の子どもたち-」

川久保ジョイ 「to dig a hole #2」

ユミソン 「ホームレスの振る舞いは「移民」のそれ (美術手帖『「移民」の美術』より)」

(ウェブサイト「入管法改悪に反対するアーティスト」より

<https://takiasako3.wixsite.com/nonyukan>)